

名作歌舞伎全集

第十九卷

名作謡曲は全集 十巻

舌出し三番叟 娘道成寺 鷺娘 身替りお俊 鞍馬獅子
関の扉 戻り駕 草摺引 権八 鬼次拍子舞 今様須磨
三人形 かさね 六歌仙 保名 お染 藤娘 蜘蛛の絲
京人形 三社祭 勢獅子 靱猿 供奴 将門 どんつく

連獅子 市原野のだんまり

宗清 田舎源氏 三人片輪

山姥 棒しばり 太刀盗人

お夏狂乱 良寛と子守

昭和

東京創元社

全集伎舞歌名

第19卷 舞踊劇集一

昭和四十五年五月二十五日 発行
(昭和四十七年九月三十日 三版)

監修者

発行所

郡 司 正 勝
山 本 二 郎
戸 板 康 二
利 倉 幸 一
河 竹 登 志 夫

株式
会社
代表者 秋 山 孝 男
東京創元社

(162) 東京都新宿区新小川町一—十六
電話 (〇三) 二六八—八二三—
振替 東京 一五六五
印刷・株式会社 金 羊 社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社 (株)万英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次 (名作歌舞伎全集第十九卷 舞踊劇集一)

舌出し三番叟しただしさんぱんそう (再春松種時)またくはるはなのおねとき……………七

娘道成寺むすめどうじょうじ (京鹿子娘道成寺)きやうかごむすめどうじょうじ……………(裝置圖 田中良)……………五

鷺娘さぎむすめ (柳雛諸鳥輒)やなぎひなしもようのうすり……………(裝置圖 田中良)……………三

鞍馬獅子くらまじし (夫婦酒替奴中仲)ふおとさかかわのなかなか……………(裝置圖 田中良)……………三

身替りお俊みがわりしゅん (其噂桜色時)そのうわささくらいろとき……………(裝置圖 田中良)……………三

関の扉せきのと (積恋雪関扉)つもちこいゆきのせきのと……………(裝置圖 佐原包吉)……………三

戻り駕もどりか (戻駕色相肩)もどりかいろにあいかた……………(裝置圖 田中良)……………三

鬼次拍子舞

(月顔最中名取種)

三

草摺引

(正札附根元草摺)

九

今様須磨

(今様須磨の写絵)

(装置図 田中 良)

七

権八

(其小唄夢廊)

(装置図 佐原包吉)

一七

保名

(深山桜及兼樹振)

(装置図 田中 良)

二七

三人形

(其姿花図絵)

(装置図 佐原包吉)

三三

かさね

(色彩間苅豆)

(装置図 佐原包吉)

三三

お染

(道行浮城嶋)

(装置図 佐原包吉)

四三

藤

娘

(歌えすく余波大津絵)

(装置図 田中良) 一七〇

供

奴

(拙筆力七以呂波)

一七二

宗

清

(恩愛蹟関守)

一七六

六

歌

仙

(装置図 佐原包吉) 一八一

三

社

祭

(装置図 佐原包吉) 一九九

将

門

(忍夜恋曲者)

(装置図 佐原包吉) 二〇三

蜘蛛

の

絲

(来宵蜘蛛線) 二二二

鞆

猿

(花舞台戯の猿曳)

(装置図 佐原包吉) 二二五

京人形きやうにんぎやう（京人形左彫）……………二五

どんつくかづらたくいのかきとまり（神楽飄雲井曲袂）……………二六

山姥やまばな（薪荷雪間の市川）……………二七

勢獅子せおじし（勢獅子劇場花簪）……………二八

田舎源氏いなかげんじ（田舎源氏露東雲）……………二九

連獅子れんじし（勢獅子巖戯）……………三〇

市原野のだんまりいちばらのだんまり（咬渡月笛音）……………三一

三人片輪さんにんかたわ 竹柴其水・作……………三二

お夏^{なつ}狂^{きやう}乱^{らん}

坪内逍遙・作

.....

(装置図 田中 良).....

三七

棒^{ぼう}しばり

岡村柿紅・作

.....

.....

三七

太刀^{たち}盗^{ぬす}人^{びと}

岡村柿紅・作

.....

.....

三九

良寛^{りやうかん}と子守^{こもり}

坪内逍遙・作

.....

三二

解説・校訂

郡司正勝

写真と資料提供―演劇博物館、演劇出版社、大谷図書館

梅村豊、郡司正勝、鳥越文蔵、小山内徹

舌^{した}出^だし三^{さん}番^ば叟^{そう}

またくるはるすずなのたねまき
(再春菰種蒔)

またくるはるすずなのたねまき



舌出し三番叟

郡 司 正 勝

ほかに「種蒔三番」「志賀山三番」などという通称がある。

文化九年九月、江戸中村座で、三代目中村歌右衛門が帰坂するお名残りに、踊ったのを初演とする。

作詞は二代目桜田治助。清元と長唄のかけあい、作曲者は、清元が伊藤東三郎、長唄は二代目杵屋正次郎。太夫は豊後路清海太夫（先の二代目富本斎宮太夫、のちの初代清元延寿太夫）。長唄は芳村伊十郎であった。清元としても、もっとも古い曲の一つである。

振付は藤間勘十郎で、千歳は、中村明石が動めた。「ひらかな盛衰記」二立目に出した。もっとも、この曲は、三代目歌右衛門が、当時、中山小十郎と名のつた初代中村仲蔵が天明六年十月中村座で踊った「寿世嗣三番」を復演し

たかたちで、今日に志賀山流の三番を伝えたことになる。

歌詞にも、その昔、秀鶴の名にしよう、都上りの折を得て、教え受地の親方に、舞の稽古を志賀山の」とあるように、秀鶴を俳名とする仲蔵に教えを受けて習った三番であることを、語っている。

請地は、初代仲蔵の住居のあった所である。また「めでとう栄屋仲蔵を」で、人差し指で、大きくひらいた口を指し、舌を出す型は、背中をまるくするとともに、仲蔵の型で、その名称の舌出し三番の由来もここから出る。栄屋は、その屋号。

収録の演博所蔵台本には、表紙に文化九年九月大吉日、紙員七枚、桜田次助、歌右衛門・七三郎・明石、豊後路連中、はやし連中とあり、中村七三郎の名があるので、最初に翁を動めたのである。

渥美清太郎の『舞踊劇集』（春陽堂版・日本戯曲全集・第二十七巻）には、その序曲として、「かっこほうろく」の条りがついている。初演のときに演ぜられたものである。今日では、翁も、かっこほうろくも伝えられていない。

舞台は松羽目、幕があくと、千歳が面箱を捧げて出て、上手の座につく。そのあと、三番叟が正面に出て、探み出しとなり立ち上がる。ここで、剣先鳥帽子の先で「大入」

という文字を書くという口伝がある。淨るりの置^{おき}があり、唄の「ほんに鶴の真似鳥飛び」で、うしろ向きに、三度跳び、前に向ってギバになる。清元のへ花のお江戸の御蟲屋を」で、三度見物におじぎ、あと千歳との鈴渡しの問答があるが、これは、今日では省略される。長唄のへ天の岩戸」は、千歳が踊るが、むかしは、三番が踊ったという。船唄が二人立ちの踊り、三番は、婚禮の仕度をし、馬にのり、清元のへ藤内次郎」となる。へさて婚禮」の条^{じょう}りが二人立ちで嫁入道具の長持唄、ものまねの振りで、のんびりと楽しい振りがついている。

三下がりのへ花が咲き候」から二人の手踊り、踊り地となり、へすぐにも帰りお目見得を」で二人が坐り、見物におじぎし、末段に、長唄でへ又こそ願う種蒔や」で、短い鈴の段となり、千歳は上手、三番は下手で、下にいて、鈴を振り上げ、舌を出してきまる。

いかにも、文化の振りのなかに、天明振りを残した仲蔵振りをうかがうに足りる。

花柳流などは、最後まで、三番は剣烏帽子をつけて踊るが、志賀山・坂東流などは、婚礼の条^{じょう}りは、烏帽子をとり、奴頭で踊る。

三番叟の衣裳は、仲蔵伝来の若松模様とか松竹梅の、厚綿ものの着流しに、鶴の絵の素袍、ただし、これは四代目

歌右衛門からであらうとする松本龜松説がある。詳しくは、「日本舞踊」第十六巻・一、二号参照のこと。また、この上演のいきさつについては、三代目中村仲蔵の『手前味噌』に詳しい。

『手前味噌』では、文化八年のことになっており、三代目歌右衛門が、お名残りに志賀山流の舌出し三番をして見たいと、座元の中村勘三郎に話したところ、当家に因みのある志賀山十一代目を相続したおせいという者がいるから、問い合せよということになり、三代目仲蔵の母であるせいを、歌右衛門自身で訪い、ちょうど、初代仲蔵の二十三回忌にもあたり追善になるからといって、へその昔、秀鶴^{ひでたけ}の名にしおう云々」という枕の文句を「これは甚だ拙作ながら上るりの置物の文句を昨夜考えて、認めて参りました」といって懷の紙入れより、小菊へ書いたものを出したというから、この置淨るりの文句は、三代目歌右衛門の自作ということになる。



能舞台の場

舌出し三番叟

能舞台の場

清元連中
長唄囃子連中

役名 翁 千歳 三番叟

本舞台、三間の間、見附け一杯、根笹を描きたる張物、
読えあり、橋がかりつき、これに根松。すべて、本行能
舞台の飾りつけ。翁、千歳、本行の通りにて揉出しにな
り、三番叟にて立ち上がり、

三番 おゝさえく、喜びありやく、我がこの所より、
外へはやらじと思う。

トこれにてチーンと正面の鏡板を打ち返す。これに延寿
太夫連中居並び、すぐに呼出しの浄瑠璃になる。

浄るりへその昔、秀鶴の名にしおう、都上りの折を得
て、教え受地の親方に、舞の稽古を志賀山の、振り
もまだなる稚な氣に、忘れてのけし三番叟、繰り出
し揉み出し一奏で、めでとう栄屋仲蔵を、
トばつくりをしてキッと見得。このツケにて、下の方の

鏡板を打ち返す。これに長頭連中居並び、

唄へ似せ紫もなかくに、及ばぬ筆に写し絵も、池のみぎわの石亀や、ほんの轡の真似鳥飛び。

浄へとつぱひとえに有難き、花のお江戸の御最良を、頭^{かしら}に重き立烏帽子。

唄へさっぱもおのが故郷へは、錦と着なすお取立て、おこがましくも五年の。

浄へ今日ぞ名残りに。

かけ合へ侍ろうよ。

トよろしくあって、

三番 物に心得たる、あどの太夫どのに、そとけんそう申そう。

千歳 丁度参つて候。

三番 某が呼び申す所に、はやぐとのお立ち、先ずもつて祝着申し候。

千歳 されば候。

三番 あどの太夫どのを、目利きたいて候。

千歳 何と御覧じ候ぞ。

三番 福人と見申して候。

千歳 言語道断、お目が利いて候。又色の黒い尉どのを目利きたいて候。

三番 何と御覧じて候ぞ。

千歳 徳人と見申して候。

三番 さん候。某は徳人の中にも、子徳人にて候。子を十人持つて候が、上五人は玉をのべたようなるめなごにて候。

千歳 先ずは揃えてお持ち候よ。

三番 十人の子を車座に置いて、一口に呼ぶように名を付けて候。

千歳 何と御付け候ぞ。

三番 先ずおッ取り違えて、おとよ、けさよ、たつまつ、いるまつ、だんだらいなごに、かいつくひつつ、火打ち袋にぶらりと付けて候。

千歳 ア、ラめでたや。その若子達の祝い月、一段と賑わしきことに思われて候。

三番 仰せの如く、あらましこれにて申そうする間、先ずあどの太夫殿には、重々と元の座敷へお直り候え。

千歳 某、座敷へ直ろうずすることは、何より以て安う候。先ずくそれにてお語り候え。

三番 イヤく、お直りのうては語り候まじ。

千歳 先ずく、お語り候え。

三番 ア、ラ、ようがましや候。

トこれより振りになる。千歳を相手に遣うことあり、

唄へ天の岩戸の神樂月とて、祝うほんその年も、五つ



「花にのめりし女郎と申しはい」 三番 坂東寅助 千歳 河原崎権十郎

や七三つ見しよと、縫いの模様のいとさまぐに、
竹に八千代の寿こめて。

浄へ松の齡の幾万代も、変わらぬためし鶴と亀、びん
と跳ねたる目出鯛に、海老も曲がりし腰慰斗目。

唄へ宝づくしや宝船。

浄へヤラくめでたいよの。

唄へ四海波風納まりて、

浄へ常盤の枝ものほんよえ、葉も茂る。えいのんえ
い。えいさら鯉の滝登り、牡丹に唐獅子唐松を、見
事にく。

唄へさつても見事に手を尽くし、仕立て栄えあるよい
子の小袖、着せて着つれて参ろかの、肩車にぶん乗
せて、

浄へ乗せて参ろの氏神詣で、宜禰が鼓のでんつくで
ん。

唄へ笛のひしぎの音も冴えたりな、冴えた目元のしお
らしき、中のく中娘を、ひたつ長者が嫁にほしい
と望まれて。

浄へ藤内次郎がとち栗毛に乗って、エイくく、え
っちらおっちらわせたので、その意に任せ申し
た。

唄へさて婚礼の吉日は、縁を定の日を選び、送る荷物

はなに／＼やろな、瑠璃の手筈に珊瑚の櫛笄、玉を
のべたる長持に、数も調度の潔く。

浄へ様はなア百までナアエ、わしや九十九までナア、
エ。

唄へともになア白髪のアアエ、生ゆるまでもよナア、
エ。

浄へ嫁とはいえど世間見ず、駕籠の内外の思惑が、は
ずかしみ／＼案じられ、初に添い寝の新枕、交わす
詞もなんと言うて、どうして宵の口と口。

唄へ雌雄の銚子の盃も、飲まぬ内から殿御にのまれ、
耳より先へ染めて濃き、顔も紅葉の色直し、それか
ら床に差し向かい、怖さ半分嬉しさも、先へは出で
ず後ずさり。

浄へ互いに手さえ鶏鐘の、声を取り持ちよう／＼と、
明け行く空を月にして。

唄へ妹背結んで女夫仲、睦月と岩田帯。

浄へやがて孫彦玄孫を儲け、末の楽しみこの上や。

唄へあら喜ばしの尉が身と。

浄へ心浮き立つ踊り唄。

トこれより手踊り模様になり、

唄へ花が咲き候黄金の花が、てんこちない、今を盛り
と咲き匂う、てもさても見事な黄金の花。

浄へ欲しかおましょぞ一枝折りて、そりや誰に、いと
し女郎衆のかざしの花に、ほうやれ、恋の世の中。

唄へ実に恋の世の中。

かけ合へ面白や。

浄へ直ぐにも帰りお目見得を。

唄へ又こそ願う種蒔や。

ト少し鈴の段あつて、

浄へ千秋万歳。

唄へ万々歳も、

かけ合へ賑わう芝居と舞い納む。

ト段切れへかぶせ、片シャギリにて、

幕

